

鉄労 以下の「タレタレ」告発 路線をつき 動労本部



81.7.4
No.783

国鉄千葉動力車労働組合

千葉市要町二一八（動力車会館）
（鉄電）二九三五〜六（公衆）〇三三（二二）七二〇七



動労「本部」反動分子は、わが動労千葉破壊のため常習のコロビ屋・革マル分子川嶋田誠を使った「6・12事件」をデッチあげ、県警・船橋署に告訴するという全く許せない暴挙をおこなった。

今、動労「本部」反動分子は、国鉄三五万人体制下で自らがセクト的に生き延びることを最大の目標に、一切の合理化に卒先協力し、これを批判し闘う部分に対しては、デッチあげとデマをもって警察権力および国鉄当局に弾圧と管理強化を積極的に要請し導入しているのである。

まさに、動労の運動が総評・公労協労働運動の中でかつてない異質の「労働組合」として反動化し、墮落し、変質してしまっているのである。

わが動労千葉が、分離・独立をかけて動労大改革運動に決起したことの正義性と正当性は、ますます明らかとなり、全国の動労組合員の声となり力となつて拡大し前進している。

動労「本部」が当局に、「職場管理体制の強化」を要求する！

動労「本部」は、わが動労千葉に対する組織破壊攻撃を目的として、コロビ屋・革マル分子川嶋田誠を使ったデッチあげ「6・12事件」なるものをもつて警察権力にわが動労千葉の組合員十名を告訴・告発したのである。しかし、これだけでもあきたらないと見るや、何んと国鉄当局に対して正式の団体交渉をもつて、①当局の管理体制に欠陥がある ②千葉動労をいつたどのようか考えているのか、などと当局に対して「動労千葉への弾圧をもつとピンピンやってくれ。職場管理体制をもつとしっかりやれ」と泣きつき、せまっているのである。

一体全体、こんな恥知らずな反動的な「要求」を行なった労働組合が鉄労をいかに他にあつたであらうか！ しかも正式の「団交」でだ！

さらに、この「団交」の内容を『動力車新聞』（第一三八〇号・6月24日付）に堂々と大見出しをつけて載せ、反動的で恥知らずな墮落ぶりを自ら満天下にさらけ出している。コロビ屋デッチあげ・タレ込み告訴という反労働者の本性もさる事ながら、マル生集団Ⅱ鉄労も顔まけのこの徹底した反階級的な感性は実に驚くべきものがある。

このことは、「本部」革マル反動分子が引まわしている「国鉄動力車労働組合中央本部」が、もはや国鉄当局の労働担当課そのものになり下つてしまったことを示している。

動労「本部」反動分子の歴史は、暴力支配と裏切りと反動化の歴史

動労「本部」反動分子は、現在、「権力の謀略」とか「あたりまえの労働運動をあたりまえにやる」とか「暴力では労働運動はできない」などといっている。

しかし、周知のように、この十数年間、動労内

において彼ら「本部」反動分子は、自分と意見を異にする部分に対してことごとく暴力的敵対と排除の論理をもつて襲いかかってきた。そして、わが動労千葉結成以降も、79年4・11錦糸町、4・17津田沼、80年4・15津田沼などをはじめ全支部において、あらゆる限りの暴力的襲撃を行なってきた。特に、「4・17津田沼電車区襲撃」では、多数の武装部隊で白昼公然と武器をもつて庁舎を破壊乱入し、労働安全衛生委員会に臨んでいた津田沼支部役員全員に重傷を負わせ、中でも片岡支部長に対しては頭ガイ骨骨折の重傷をおわせ、国鉄当局・県警機動隊・船橋署公安等に守られて武器をもつたまま退去するという連携ぶりを示した。さらには、「4・15津田沼」では、自分から襲撃しておいて、失敗するや当局に泣きついて布施副委員長への解雇を要請し、本年三月ジェット決戦ストに対しては、当局の先兵として白腕職制・公安機動隊に守られてスト破りを行つてきたのである。

そればかりではない。「55・10」においては、乗務員運用合理化を「千葉においても十一月強行実施すること」を条件に卒先して認めていくという極めて反労働者の・反動的裏切りを公然と行つてきたのである。また世の中、革マルしかかつかまわっていないセクト的「水本」デマ運動を警察のスパイを世話人として動労を引まわし、居なおっているのだ。

そして、今回ついにデッチあげ・タレ込み告訴をもつて警察への闘う労働者の売り渡しを行ない、そればかりか、国鉄当局に職場管理体制の強化を要請する「本社団交」！

一体全体、このどこをつけば「反謀略・反権力・反ファシズム」などといえるのか！ 何が「あたり前の労働運動」だ！ 動労「本部」反動分子の歴史は、このようにことごとく、暴力支配と裏切りと反動化、権力・当局の先兵化の歴史に他ならない。

全国の組合員の皆さん、今や「動労大改革」こそが緊急かつ最大の課題となった。確信高く前進しよう！